

＜書 評＞

二木 立（日本福祉大学教授・前代々木病院リハ科）

医療経済学

臨床医の視角から

福井次矢（国立病院医療センター・循環器科）

つい最近まで、米国でプライマリ・ケア内科学を学びながら、私は、日米の医療の基本的な相違点は一体どこに起因するのだろうか、と考えつづけた。数字（診断過程や予後推定における確率）を好んで口にする症例についてのディスカッションからはじまり、診断や治療決定上の効率性重視、頻繁にカンファレンスで扱われた医療政策や医療経済学など、かなりの部分は医療と社会経済の接点にある学問の導入による差違であろうと思わざるを得なかった。日本の医学教育と医療のなかで、たいした問題意識もなく育った私は、外国の医療を直接体験するなかで、社会経済的背景（マクロレベル）の違いが、ひとりひとりの医療従事者（ミクロレベル）の行動や考え方にこれほど大きな影響を与えることを身をもって知ることができたと言える。

帰国後、わが国独特の医療に再び

巻き込まれていきながら、ミクロとマクロレベルでの定量および経済学的視点の乏しさに違和感のようなものを感じていた。そのような時、出版されたばかりの本書を手にすることができた。本書には、臨床医の視角から、という副題がつけられているように、医学部卒業後主としてリハビリテーションの分野で臨床に携わってきた二木氏が、豊富な臨床経験を生かして、“医療技術進歩と医療費増加”を中心としたアクチュアルな諸問題の原理的・実証的分析を行ったものである。

本書の構成は6つの章と補論から成り、医療と経済学、「国民医療費」の構造分析と国際比較、費用便益分析とその展開、医療技術進歩と医療費増加、医師所得の構造分析と将来予測、病院倒産と病院経営、医療経済学の国際的動向などが扱われている。

一読して印象に残ったのは、わが国における医療と経済学の現状が的

確に、しかも非常にわかり易く紹介されるとともに、国際的な視野から眺められているということである。

わが国の医療経済学は、マクロ経済的分析には秀でるが、ミクロ経済的研究面での立ち遅れは著しいことが指摘されている。わが国では病院という個々の施設においても、院長をはじめとする管理機構のみが医療経済に積極的に関与し、実際に患者のケアにあたる若い医師は目前の臨床にのみ没頭していればよい、という風潮が支配的である。たとえば、これに関しては、第6章で二木氏は、いかにしてA病院の近代化がミクロレベルまで行われていったのか、その具体例を詳細に説明されていて、参考になる点が多い。

この一点をとっても、医療経済学は管理職についていない、若い医師にとっても非常に役立つ学問であることがよく示されている。そのうえ、費用便益分析や医療技術の評価、一般的健康水準指標の問題点など、多くの up-to-date なトピックが読み易いかたちで整えられており、二木氏の筆力に敬意を表するとともに、多くの医師に読まれることを望むものである。

（A 5，頁 284，1985，¥ 3,300，
〒300 医学書院 刊）